

児童養護施設での実習

—— 子どもたちとの関係性と自分の立場において、できることとは ——

八 子 めぐみ (臨床心理学分野)

実習の概要

2004年6月から8月までの期間、東京都内の児童養護施設で実習を行った。児童養護施設とは、18歳までのさまざまな事情にて家庭で生活できない状況の子どもや、環境上・生育上養護を必要とする子どもを受け入れるところである。子どもたちの入所理由は様々だが、中でも近年被虐待が増加しており、私が実習を行った施設でもこれが最も主要な部分を占めていた。

実習は、基本的に毎週金曜日の13時から21時まで行われた。これは、幼児が幼稚園から帰る頃から、多くの子どもが就寝するまでの時間である。そこで、子どもたちの生活の中に入り、遊び相手や話し相手、幼児の入浴の補助、寝かしつけなどを行うことを通して子どもたちと関わった。

この施設には子どもたちが生活するためのいくつかの居室があり、私が入った居室には、年齢の異なる七人の子どもが暮らしている。そこには、女性二人と男性一人の担当の職員がついており、常にその中の一人が入っている。

実習の目標

この実習は、心理臨床家を目指すべく大学院に入学してはじめてのものである。だからこそ、現場で新しい学びができる機会として大きな期待を抱いていた。しかし一方で、児童養護施設という子どもたちが毎日の生活を営む場に、実習生としてでも部外者の自分が一時的に入り込むということに多少違和感も覚えていた。つまり、そのような場所で実習をすることは、自分の家に知らない他者が入り込み、プライバシーにまで踏み込まれる経験を子どもたちにさせてしまうことであり、自分の学びとはそのような子どもたちの犠牲の上に成り立つことなのかという戸惑いを感じていた

のである。現場での経験から多くのことを学びたいという意欲と、このような戸惑いとの間でしばらく葛藤を感じていた。

だからこそ、子どもたちを傷つけないようにするにはどうしたら良いのか、実習生として子どもたちに何ができるのかということが、この実習を通しての大きなテーマとなった。そこで考えたのが、次のようなことである。ここで生活する子どもたちの多くは家庭で虐待を受けてきたため、心のどこかでは人に対して不信感を抱いているかもしれない。この施設では毎年多くの実習生を受け入れているため、その「外部の人間」に関心を向けられ、少しでも共感が得られたという経験を積み重ねていくことで、子どもたちは人間関係にいくらか肯定的な感情が持てるようになるのではないだろうか。将来、子どもたちがこの施設を巣立って社会に出たとき、他者に対していくらか信頼感を取り戻せるようになることの小さなきっかけになりたい。私は実習を前にそのようなことを考えていた。

しかし、実際に実習が始まり、スーパーヴィジョンも受ける中で、「関心を示し、共感する」ということがどのようなときに必要で、具体的にそれをどのように示せばよいかということが、思っていた以上に難しいということに気づいた。また、子どものけんかや問題行動に出会ったとき、自分は実習生の立場からどのような介入ができるのかということにいつも悩んでいた。以下に子どもたちと関わる際の迷いとそこから学んだことについて述べていきたい。

実習生であることの限界

— 子どもたちのけんか、もめごとへの介入 —

実習初日から、子どもたちは人懐こく私に近づき、思ったよりスムーズに仲良く遊んだりすることができているように感じていた。しかし、これは、子どもた

ちが私のことを受け入れていることを表しているのではないということに気づいていった。子どもたちの間でけんかやもめごとが起こり、そこに私が介入しようとする、子どもたちからそれを拒否されるような場面が何度かあった。ときには「おねえさんには関係ない!」という言葉が浴びせられ、自分がこの場において「部外者」であることを痛感させられ虚しさや無力感を味わった。そして、結局何もできずにその場を離れてしまうこともあった。この時、私は肯定的な人間関係を提供する「外部の人間」ではなく、信頼できない「部外者」でしかない自分に、何ができるか全く分からなくなってしまったのだ。

こうしたことについて、施設の職員に相談した際、次のようなコメントを受けたことがある。子どもたちの間でけんかやもめごとは付きもので、ときに必要なことでもあるが、例えば年長児二人対年少児一人というように力関係が明らかに不均衡な場合は公正なけんかとは言えず、このような場合には大人の介入が必要であるとのことだった。そのため、実習生だからといって遠慮せずに、話を聞くだけでも良いからその間に入るべきであったということと言われた。このような職員の助言は理解できるのだが、同時に腑に落ちなさも感じていた。そこで、大学の指導教員による個人スーパーヴィジョンでは、なぜそれ以上の介入ができなかったのかについて、自分の中を振り返る機会をもつことになった。その結果「嫌われたくない」「傷つけない」という気持ちが自分の中に存在していたことに気づくことができた。そして、職員の助言のように介入の必要性の意味を理解する一方で、まだ私のことを受け入れていないという子どもたちの気持ち、私の抱いていた「傷つけない」という気持ち、子どもたちの「侵入されたくない」という気持ちのいずれをも尊重することが必要かもしれないと感じた。

介入が必要であることも、侵入しすぎてはならないということも、それぞれ納得できることであり、子どもたちと接しながら感じていたことでもあった。個人スーパーヴィジョンを受け、改めてどれも否定することはないとは意識したものの、この頃の私には、これらを大切にすることは両立しえないことのようにも思っていた。職員の言うように、子どもたちの間でのいじめという悪い結果を防ぐためにも、大人が介入を行い、不公正なもめごとやけんかの方向修正を促すことが必要である。私自身にも、子どもの好ましくない行動は放っておけないという思いがあった。しかし、私

が「部外者」であることは無視できない事実であり、介入を行うことで、その事実を押し切って子どもたちの領域に「侵入」してしまうことにならないかという不安もあった。子どもたちとのゆるぎない信頼関係が形成されていない私が、仮にそれを行おうとしても、子どもたちに拒否され、それまで少しずつ築いてきた関係が崩れてしまうかもしれない。今考えれば、整理しきれなかった実習前の疑問や戸惑いが、実際に子どもたちと関わる中で具体的な形になって現れてきたのかもしれない。

このような葛藤と混乱を抱えたまま、言語や暴力で他児を傷つけたり、性的な言葉をむやみに発したりなど、子どもたちへの介入が必要だと思われるいくつもの場面に出会っていった。このような子どもたちの問題行動一つをとっても、その背景には、過去に受けた虐待による外傷体験や彼らの人間関係のあり方など、長い時間を経て作られてきたさまざまな要因が存在する。そのことに気づいていくほど、子どもたちの深い領域に介入することへの戸惑いはますます強くなった。それでもやはり問題行動を放っておくことができず、けんかの介入をしては、「わかってもらえないのに何でそんなことが言えるんだよ!」と跳ね返されながら過ごした。実習の終わった今でも、信頼関係の程度がそれほどでもない人間にどのような介入ができたのか明確な答えをもっている訳ではない。

実習で学んだこと

実習終了後、グループスーパーヴィジョンの場でこの児童養護施設での実習を振り返る機会を得た。指導教員や他の院生から得たコメントにより、自分の対応の問題点や葛藤の内容がより明確になったように思う。以下はそれによってさなれた考察である。

(1) 関心に向け、共感することとは

この実習の中で、他児を傷つけるような好ましくない行動に出会ったとき、それをした子どもに対して私はすぐに「それはいけないことだ」という自分の考えを押し付けようとしていた。しかし、子どもたちにはそれぞれ言い分があり、それをわかってくれなければ納得がいかないというメッセージを投げかけられていたように思う。子どもたちにその行動は好ましくないということを知ってもらふ必要はあると思う。ただし、それをどうしても伝えたいときには上から教える

ような態度ではなく、自分も子どもと同じ視線に立ってみて、そこからどうすれば良いかを共に考える姿勢が大切であったのだということに気づかされた。職員たちの対応の仕方を振り返ってみると、行動をとがめる前にまずは子どもの話をじっくり聞いていたように思う。

はじめに述べたように、この実習での目標は子どもたちに「関心を向け、共感する」ことであった。普段の生活の中で、子どもたちの会話や遊びなどに関心を向けることはしてきたつもりであった。しかし、前述のような介入が必要な場面ではどうしても自分の考えが先行してしまい、それを忘れがちであった。しかし、そのような場面だからこそ、そして、まだ子どもたちに本当の意味で受け入れられていないからこそ、子どもたちの行為の背景に関心を示し、気持ちに耳を傾けることが必要だったのかもしれない。信頼関係はそこから築かれていくのだろう。

(2) 関係の中で、できることとできないこと

しかし、私のような立場の人間が、仮に職員と同じような対応をしたとしても、その関係性によって子どもたちは異なる受け取り方をし、かえって防衛を働かせてしまう場合もあるのではないか。実際、子どもたちと関わる中でそのような限界をどことなく感じていた。しかし、関係のあり方によって、それぞれに意味のある関わりができるということにも気づいた。最も信頼できる職員がいる一方で、何となく気にかけて遊んでくれる大人もいる。そんな中で、子どもたちは様々な自分の側面を見せ、あらゆる方向から支えられているのかもしれない。

実習が終わった後、受験を控えた1人の子どもの学習支援をすることになった。この時期、進路などに対して不安なこともあったようだが、それは最も心の許せる職員にのみ打ち明け、私の前ではいつも元気に振舞っていた。一方で、私と行う作文の練習の中では、身近な職員には照れくさくて言いにくいような将来の夢、施設・職員に対する思いなどをのびのびと綴っていた。私との関係は、適度に距離があるが、彼女にとってそれなりに安心できるものとして、彼女が自分自身と向き合える場が提供できていたのなら幸いである。

まとめ

相手との信頼関係が確立されていなければ、できることに限界はある。したがって、信頼関係を築いていくための対応の仕方を考え、努力することは必要である。しかし、信頼関係が確固たるものではなくとも、何もできないわけではなく、その関係のやあり方だからこそ可能な有意義な関わりもあるのではないだろうか。そのため、臨床場面において、相手と信頼関係を築くことにとどまるのではなく、自分の存在は相手にとってどのような意味があり、何が求められているのか、自分はこの相手の前で何を感じ、それはどうしてなのか、ということまで考えることが重要である。

参考文献

浅倉恵一他 全国児童養護問題研究会編『児童養護への招待
若い実践者の手引き』ミネルヴァ書店

(2005. 3. 受稿)